

中学時代に「大きい石の顔」という短編を授業で習った。これも池田喜美子先生の国語の授業だった。池田先生ばかりで恐縮ではあるが、先生はそういった授業を好まれた。外国の短編小説だった。粗筋はこうである。

ある田舎に働き者の少年がいた。少年は一日働きつめに働く。岩に座って疲れを癒やす。その少年の向かいには大きい崖壁がある。その崖壁が夕日を

浴びると大きい人間の顔になる。その顔は荘厳で慈悲にあふれている。少年はその大きい石の顔の人に会いたくて旅をする。偉い政治家や大金持ちの商人、有名な芸術家に会う。しかし、どの顔も大きい石の顔

老人の顔は大きい石の顔にそっくりであった。こんな粗筋である。人に求めるな、自分の中にこそ求めろ、といったのかもしれない。わたしは職業柄よく旅をする。夕暮れ、海を眺めている茶褐色

る。その魚村の漁師は天気予報よりも老人の知識と経験を信じ、そんな老人が昔はどの村にもいた。映画「七人の侍」でも野武士に苦しむ農民が集まって相談する。結論は「じさまに相談す

# 大きい石の顔捜す

ではない。旅を続ける少年は大人になり、中年になり、老人となつて生まれ故郷へ帰つて来る。老人となつた少年は岩に座り、夕日を浴びる崖壁の大きい石の顔につぶやく。「ああ、大きい石の顔はとうとういなくなつたなあ」。老人となつた少年に夕日が差す。その夕日を浴びる

の肌色の老人に出会うと「大きい石の顔」を思い出す。老人が「じさまに相談する」「やるべし」である。「じさま、どうやるだ」明日は晴れるといえは暗れであ

「腹の減つた侍を雇うだ」。それでおかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜世子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。71歳。

れで決まる。老婦人は子守をしながら、村の伝説を語る。伝説には真実が籠っている。「あの土地には家を建てちゃなんねえ」。沼地を埋め立てた土地であつたり、大雨になると崖が崩れたりする土地である。そうやって村社会は形成されていた。これが村を守る知恵であつた。わたしはあちちつかえこつちつかえと、韋駄天のように走り回る人生であつた。大きい石の顔を仰ぐ老人のような人生はなかつた。そして、韋駄天走りの旅の途中、大きい石の顔のような人に巡り合えなかつたのは老人と同じである。大きい石の顔とは堅気を貫いた人の顔である。



おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜世子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。71歳。

(松浦市出身)